

## 問い

斉藤 洸星

それは問いだよ、と少年は言ってくれた。

石は夢を見ていて

森は頬を赤らめて

砂漠は 何もすることはできない もどかしい

空は疲れをにじませるけど

星は嘘をついても瞬いて

塵の雲は 雨を恥じる

大地は、ただ、振り落とされたくないだけ

それでも

夜の話をしよう

無限遠方にとる 短い夜の話

その終端まで向かえば

荒々しく退屈な眺めが 絵を隠していても

火を盗んでも

人を踊らす

人々の絵

真っ黒な絵

人々は踊り揺れる 揺れ踊る

星にぶつかっても 踊り揺れる 揺れ踊る

昔からそう

そこに逃げ出そう そうすればきつと

余分な次元があふれたら

蝶も羽ばたける隙間がある

光の粒を捌けたら

まばゆい魂の密度がある

純粋な表面 骸が落ちれば

卵が割れることも

常夜灯が消えることもない

無言の対話 星々 不意にともされる瞳

思えばそこから始まった

音の汀 打ち寄せる沈黙は

百億あれば足りてしまう

地平は老いる

祭主はいない

その日々にだけ

愉快な問い

距離が出会った それでも引き金を引いた

罅が輝きだす

絵が浮かび上がる

短い夜 一步前の無限まで

僕たちは間に合う